

守川知子著

『シリア派聖地参詣の研究』

坂本 勉

ムスリムにとつて聖地とは、アラビア半島西岸ヒジャーズ地方にあるメッカだけにとどまるものでない。イスラームの教えの根本をなす神の唯一性論(タウヒード)からすると逸脱し、時に非難されることもある聖者信仰にもとづく聖地というものが、イスラーム世界の各地には数多く存在する。シリア派の信徒が尊崇してやまないイマームたちの墓所・霊廟やスーフイズムの教団の創始者、それに連なる有力な聖者たちが葬られている墓廟がそれにあたる。

ムスリムはメッカの聖地に赴くとともに、これらの聖地に参るといふことを今に至るまであわせ行ってきた。しかし、同じように聖地に行くといつても、メッカとそれ以外の場所に赴く行為は、聖地観の違いから言葉の上で厳密に区別される。メッカの聖地に赴く行為はハッジ(巡礼)と呼ばれ、それ以外の聖地に赴くそれはジャーラ(参詣)と言われる。このたび、守川知子氏によつて上梓された『シリア派聖地参詣の研究』は、メッカ巡礼のそれにくらべるとこれまでほとんど体系的に研究がされてこなかったシリア派のイマーム信仰、それにもとづく聖地参詣にかんする初めての本格的なまとまった労作である。

本書は一〇章から成り、これに「はじめに」と「おわりに」、さらに資料編、参考文献、索引が付けくわえられるという体裁をとるが、本論の内容は評者の私見にしたがつて敢えて思い切つて分けることが許されるならば、前半部(第一章「シリア派教義とイマーム参詣」、第二章「史的背景」、第三章「アタバートへの道」、第四章「聖地にて」、第五章「死者たちの聖地参詣」と、後半部(第六章「外交問題としてのアタバート参詣」、第七章「参詣者の安全保障」、第八章「近代化」の狭間で)、第九章「アタバート参詣者とオスマン朝下のイラク」、そして結論部分にあたる第一〇章「イラン社会におけるアタバート参詣」の三つに分けていくことができるように思われる。

全体の構成にかんしては「はじめに」の部分で明確に提示がなされ、また各章の記述も読者に対して問題点と要旨を絶えず喚起明示するというかたちが取られていて、全体の論旨はきわめて明快である。このため、各章ごとに内容を要約し、それぞれについて批評、感想を述べていくという書評の仕方はいたずらに煩を重ねるだけだと思われるので、以下においては前述の三つの区分けにしたがいながら内容を紹介し、論評していくことにしたい。

前半部を成す五つの章は、シリア派ムスリムが行ってきた聖地参詣の歴史と盛衰、参詣の具体的な実態、そしてこれらの問題を考へていくにあつてもっとも重要なと思われる参詣者の内面的な動機の問題が扱われる。

シリア派の起源は、周知のように預言者ムハンマドによつて後継の指導者に指名(ナッス)されたとされる初代イマームIIア

リーのまわりに党派が形成された七世紀前半に遡ることができる。このアリーが暗殺された後、その地位はウマイヤ朝、アッバース朝の時代を通じて直系の子孫によって世襲されていくが、そのほとんどはスンナ派を奉じる両王朝との対立のなかで非業の死を遂げる。これに対してシーア派の信徒はこれらイマームたちを死してなお神の恩寵を保つ聖者とみなし、彼らが葬られていた墓を聖地として崇め、そこに参詣するというを行っていた。

一〇世紀半ば忽然とこの世から姿を消し、終末の直前にメシアとして再臨するまで「お隠れ」の状態を続けると信じられている第一二代目のイマームを除く一人のイマームの墓は、アラビア半島のメディナ、イラクのナジャフ、カルバラ、カーズイマイン（現在はバグダードの市街地に編入）、サーマツラー、そしてイランのマシユハドにそれぞれ散らばっている。このうち聖地としても重視され、篤い参詣の対象とされてきたのは、六人のイマームたちの霊廟があるイラクの四聖都である。守川氏が本書において扱うのは、アタバートと総称されるこれらの聖地・霊廟に対する参詣である。

アタバートの墓廟群は九世紀後半にはすでに存在していた。しかし、そこへの参詣が盛んに行われるようになるのは、守川氏によれば一九世紀半ばを過ぎてからのことだという。守川氏は、アッバース朝治下のバグダードでシーア派政権を樹立したフワイフ朝、一六世紀初頭にシーア派を国教としたサファヴィー朝期にそれぞれ書かれた法学書、歴史書などに拠りながら、近代以前においてアタバート参詣が行われていたことは疑いないが、メッカ巡礼とくらべるとさほど普及しておらず、重きも置かれていなかっ

た。それが盛んに行われるようになるのは、ペルシア語の参詣記がカージャール朝期に多数著されたことによく示されるように、近代になってからのことだと主張する。

この史料論を踏まえての見解は、的確な指摘だと思われる。カージャール朝期には参詣記のみならず、メッカへの巡礼記、イラン国外への遣使記、国内の巡察記など、夥しい数の旅行記が著された。これらは同じ時期にトルコ語、アラビア語で書かれたそれと比べても質・量において突出しており、社会史、文化史の史料の宝庫を成しているが、この点に慧眼をもって着目し、史料を綿密に読み込んで著された成果がこのたびの守川氏の研究だといえることができる。本書が扱った重要な参詣記については資料編において詳細、周到な解題が付されているが、敢えて注文を出すとなると参詣を実際に行った人物、その旅行記の特徴、性格について少なくとも主要なそれにかんしては、重複を厭わずに前の方の本論第二章、ないしは第三章において触れてもらえると、スムーズな理解という点から読者には親切だったように思われる。

イランからイラクの聖地へ向かう実際の旅のあり方については、ペルシア語の参詣記以外に欧米人、日本人が書き残した旅行記、さらにはカージャール朝やオスマン帝国の公文書などから関連する事実を丹念に拾い出し、それにもとづいて周到な整理、記述がされている。これから四大聖地へのルート、参詣時期、移動の仕方と手段、宿泊先と費用の問題、イランからイラクの聖地に行く年間の参詣者数、聖地での滞在期間と過ごし方、参詣儀礼（作法、祈祷文、礼拝の仕方）等、およそ参詣の旅に関わる事柄が細大漏らさず、詳細に明らかにされる。メッカ巡礼との比較も

随所でなされ、これによってアタバート参詣の旅の特徴がよく掴めるようになってきている。その説明は本文だけでなく、註においても補足的にかなりの分量を割いて書かれている。著者の事実へのこだわり、それを正確に記述しようとする歴史家としての真摯な姿勢がこうしたスタイルの多用につながったと思われるが、読者の側からすると流れを中断される嫌いがなきにしもあらず可能なかぎり本文の方に盛りこんで書いていただくと、より理解が容易になったのではないかと思われる。

前半部において評者にとつてもっとも印象に残り、重要だと思われるのは、なぜシリア派の人びとがイラクの聖地に足繁く向かうかという動機の問題である。この点について守川氏は一七世紀サファヴィー朝の時代に活躍したウラマー^{II}シャイフ・バハリーの著した法学書『アッバース大全』に主として拠りながら、それが罪の赦しや病氣直し等の祈願成就、最後の審判の際におけるイマームによる神への執り成しなどの功德を求めてのものであったと指摘する。この史料については資料編において別に精細な翻訳もされている。こうした基礎的な史料を探し出し、緻密な分析を加えて動機というシリア派の人びとの心性に迫ろうとする守川氏の手法と姿勢は、高く評価されるべきものがあり、彼女の優れた功績の一つである。もともと、一九世紀以降に著されたペルシア語の参詣記には動機にかなり十分に書かれておらず、『アッバース大全』との間にギャップがあることは惜しまれる。これは守川氏の個人的責任によるものではなく、本文のなかでも指摘されているように動機についてその心情を赤裸々に必ずしも語るうとしない当時の旅行記の一般的な特徴に資があるといわなければならぬ。

ばならない。

かつて評者もメッカ巡礼にかんする本を出したことがあるが、同じように隔靴搔痒の思いを強くしたことがある。『アッバース大全』のような法学書と一九世紀半ば以降に書かれた参詣記との間に横たわる動機をめぐる記述の落差をどう埋めていくか、これは今後さらに追求していかなければならない大きな課題である。守川氏が史料として拠った参詣記の著者の多くは、カージャール朝の官僚である。彼らの置かれた立場、あるいは個人的な関心が動機についての記述を少なくしているとも考えられるが、法学書とのギャップを縮めていくためにも官僚以外の人たちが書いた参詣記とは違うものをさらに発掘していく努力をしていくことが求められる。それを踏まえてアタバート参詣に寄せるシリア派の人びとの思い、心情を法学書とは違ったレベルで具体的に明らかにしていくことを是非とも要望したい。巡礼・参詣研究のなかでシリア派の聖地参詣、とりわけアタバート参詣を取りあげる意義は、メッカ巡礼とはレベルを異にする動機、心性を明らかにすることにあり、ここにこそシリア派聖地参詣を研究する要諦がまつているのではないかと思われる。

このことは、シリア派独特の風習である死者の聖地への移葬についてもいえる。守川氏はイマームの墓廟近くに埋葬され、神の恩寵にあやかりたいというシリア派の人びとの切々たる心情を欧米諸語、日本語で書かれた史料に主として拠りながら明らかにしている。史料の引用は周到であり、これまで奇習の面だけが強調され、その全体像がきちつとしたかたちで示されてこなかった死者の参詣について詳細に提示している。ただ、守川氏自身も断つ

ているようにシーア派の信徒でない外部観察者の記録に抛りながらの記述であることも否めず、これを乗り越える内側の史料の探索をこれから先、望みたい。

第六―九章の後半部は、イランとオスマン帝国との間の関係史を踏まえた上で聖地参詣をめぐる政治的、外交的な問題、イランからの参詣がイラクに及ぼす経済的、宗教的な影響について論じられる。イラクは一六世紀以降、オスマン帝国領になった。こうした状況のなか、シーア派を国教とするサファヴィー朝とそれに続くカージャー朝は、国外のイラクにある四聖地に向けてイラン人が順調に参詣の旅を行っていたよう外交交渉を重ねた。その結果四つの協定、条約が両国間で結ばれたが、これにしたがって参詣が行われた事情、その過程で生じる問題がペルシア語のみならずオスマン・トルコ語で書かれた史料を使って明らかにされる。

旅行記以外にもイラン外務省付属外交文書歴史センター、トルコ総理府オスマン文書館にそれぞれ所蔵される外交文書、またオスマン帝国のバグダード州政府から中央政府に向けて発信された上申書、内務報告書なども参照され、イラクをめぐるイランとオスマン帝国との関係史にはじめて本格的に光をあてた読みごたえのある論考となっている。アマスィヤ協定（一五五五年）、ゾハーブ協定（一六三九年）、キヤルダーン条約（一七四六年）、第一次エルズルム条約（一八二三年）、第二次エルズルム条約（一八四七年）、それぞれの内容を逐一綿密に比較して最終的に一九世紀半ばに結ばれた条約によってイランはオスマン帝国から参詣

者に対する安全保障の確約を取り付け、これによって一九世紀中葉以降イランから聖地参詣がさかんに行われるようになった事情が明らかにされる。生命・財産を脅かされる危険を回避するため参詣者たちは「群参」、すなわち集団で旅をする自衛策を講じたこと、またオスマン帝国の方でもクルド、アラブの遊牧民の襲撃に備えて護衛体制を敷いたことなどが詳しく論じられ、いずれも実証的で説得力ある論が展開されている。

オスマン帝国領内にあるイラクのシーア派聖地に国境を越えて行く際、イランからの参詣者が現実には遭遇し、悩まされる切実な問題は、通行証と検疫制度、関税と通行税の徴収であった。これについて守川氏はオスマン帝国とカージャー朝、それぞれにおける近代化の速度の違いに着目して論じる。タンジマート改革に早くから着手し、近代化を進めたオスマン帝国では通行証の発行・検疫の実施が早くから導入されたが、カージャー朝ではそれが遅れた。このような近代化の時間的なずれによってイランからの参詣者は、それまで経験したことのない厳しいチェックに戸惑いを感じた。時にそれはオスマン帝国に対する不満、非難となって現れ、さまざまなトラブルを引き起こした。この過程で生じた問題について守川氏は、具体的な事例を丹念に集めて明らかにするが、この部分は前半部で論じられた参詣への旅を国境管理という問題に絞ってより深く再考したという点で緻密な研究になっている。同じように参詣者が国境を越えて持ち込んだり、持ち出そうとした携帯品が商品であるかどうか、その判定と課税をめぐって両国の間でしばしば激しいやりとりがあったが、この関税問題についても十分な言及がされている。

後半部の章で評者にとつてもっとも興味を惹かれたテーマは、イラン人の聖地参詣がオスマン帝国領であったイラクに与えた経済的、宗教的影響である。毎年平均して一〇万人にものぼるイラン人がイラクに参詣に赴き、そこで彼らが落とすカネは、莫大な額に達した。それは、通行証の発行手数料、検疫期間満了証明の発行手数料、関税、バグダードの城門やテイクリス川などを渡る際に徴収される通行料、埋葬税、宿泊費や交通費など生活費として落とされる旅費等から成り、これらは総額にしてカージャール朝の国家収入に匹敵するほどであったという。守川氏の推計は、自身も断つておられるように統計的に必ずしも十分でなく、今後さらに裏づけとなる精緻な統計を集めていくことが必要だと思われるが、アタバート参詣とそれによって生じる経済問題についてのまとまった研究として貴重である。

宗教的影響にかんしては、イランからの聖地参詣がさかんになるにしたがつてイラクのシーア派ムスリムの数が飛躍的に増加したという指摘が重要である。そのきっかけになったのは、アタバートをめぐすウラマーや神学生の増加である。また、参詣者のなかにはイランに戻らず、そのままイラクに留まって現地女性と結婚する者も多く、これがシーア派人口の増加につながったという。守川氏は現在のようにイラクの三分の二がシーア派ムスリムによつて占められるようになるのはそんなに古いことでなく、ただか一九世紀中葉以降でないかと推察する。これはイランからイラクへの人口移動について、またウラマーの宣教活動についての綿密な実証研究の積み重ねが必要であるが、説得力のある提言である。

結論部分にあたる第一〇章において守川氏は、アタバートへの旅をきっかけにイランからの参詣者が「シーア派ムスリムであること」、「イラン人であること」を強く意識するようになったと指摘する。これは、メッカへの巡礼を頂点とし、諸々の雑多なイマームザード廟への参詣を最下位とする一連の重層的な巡礼・参詣のヒエラルキーのなかでアタバート参詣がアイデンティティのあり方という点で独特な位置を占めるものであったことを端的に言い表している。アタバート参詣は、イスラーム共同体（ウンマ）全体を念頭に置いて行われるメッカ巡礼と比べるとシーア派のそれを前面に押し出して行われる。他方、イラン国内にあるマシユハドの第八代イマーム廟、コムを筆頭とする多数のイマームザード廟をめぐす参詣と違ってアタバートのそれは、国民国家として脱皮すべく近代化を押し進めるオスマン帝国の厳しい国境管理に晒されながら行われた。これに刺激され、イランからの参詣者是否応なく民族意識を強く持つようになったというのが、守川氏の結論である。

本書の意義は、このような二つの宗教的、民族的アイデンティティを喚起させるアタバート参詣についてはじめて体系的に多方面から光をあてて考察したことにある。日本のみならず欧米、イラン、イラクにおいてもこのような形で著されたまとまったシーア派聖地参詣にかんする研究書は類がなく、本書はこの点においてオリジナリティに溢れるさわめて貴重な成果だということができる。これまでメッカ巡礼にかんしては史料の公刊、研究書・論文が数多く出されているが、守川氏の著作の出現によつてメッカ

巡礼と並んでシーア派の人々が重視し、行ってきた参詣（ジャーラ）の実態を具体的に把握することが可能になった。巡礼と参詣を比較する視座を提供し、イスラーム宗敎社会史研究を一步前進させたという意味で、本書の占める位置はきわめて大きい。

最後に、本書をふまえて今後に期待される課題を挙げるならば、第一にアタバート参詣の低位に位置する参詣地としてのマシユハド、コム等の諸聖地への参詣について歴史的に明らかにしていくことが挙げられる。守川氏も触れるようにオスマン帝国のイラク支配に終止符が打たれイギリスの委任統治が始まると、イラン人のアタバート参詣は困難に直面する。この結果、レザー・シャヤの政権はシーア派聖地参詣の流れを国外のアタバートから国内の聖地へと政策的シフトするようになるが、こうした事情をイラン・ナシヨナリズム、国民国家建設途上の現代のイラン史の流れのなかで見えていくことが必要である。

第二に、近現代のイラク史との関連で言えば、アタバート参詣

をジャーラのもう一つの形態としてのスーフイズムのそれと対比させていくことがもう一つの課題である。一九世紀以降、イラクではハーリド・バグダーディーによって始められたナクシユバンデーイ敎団の改革運動が盛んになる。その敎圏は創始者の故郷スレイマニエを中心とするイラク北部のクルド人居住地帯のみならずシリア、アナトリアにも波及し、シーア派が強いイラク南部地域においては深刻な対立が生まれた。イラクの宗敎状況はスンナ派とシーア派との間の拮抗としてとらえられるが、シーア派に対抗するイスラーム勢力としてもつとも影響力をもつのはハーリド・バグダーディーによって開始されたナクシユバンデーイ敎団の改革運動であった。その聖地観を含めて近現代イラクにおける多様なジャーラとイスラームのあり方を見ていくことが守川氏に求められる大きな課題のように思われる。

(A5判 四三三頁 二〇〇七年二月 京都大学学術出版会)

税込六三〇〇円)

(慶應義塾大学文学部教授)